ボランティアの未来
～若者が参加するには～

経済学部　４回生　杉村ゼミナール

藤井　邦章

目　次

はじめに
Ⅰ　ボランティア団体と若者との間のギャップ
Ⅱ　ボランティア活動とは何か
Ⅲ　ボランティア活動の意義
Ⅳ　どうすれば若者は参加するのか
Ⅴ　ボランティア活動体験報告
おわりに

はじめに

近年、ボランティア活動の重要性が高まりつつある。1995年１月17日に発生した阪神・淡路大震災当時、被災地支援の為に多くのボランティアが活躍した。その多くはニュースなどで被災地の現状を知り、少しでも役に立つ事があるのではないかと奮い立った人々である。その後も、自然災害に見舞われた地域への被災地支援のボランティアは増加していった。被災地支援ボランティア以外にも、「地域を元気にしたい」、「子供たちや体の不自由な人の力になりたい」といった思いから様々なボランティア団体が誕生していった。そして2001年１月には、アムステルダムで開催された第16回IAVE[1] 世界ボランティア会議で行われた国際理事会によって世界ボランティア宣言[2] が採択されたのだ。更に2008年からは、TBS でボランティア活動や社会貢献活動をテーマにした「ワンステップ」という番組が３年間に渡り放送された。

このように、日本だけでなく世界的にもその重要性が認められるようになっているボランティア活動がこれだけ注目され、重要性が認められているのにも関わらず、大きな課題を抱えているのである。それは「若者の参加者が絶対的に少ない」ということである。ボランティア団体の中には、若者の参加者がおらず活動を継続する事が困難な団体も存在している。特にアメリカの若者と比べて、日本の若者のボランティア活動の参加率は圧倒的に低いというのが現状である。

今後、ボランティア活動の重要性を更に高め、若者の参加を促す事が日本のボランティア活動の未来にとって最大の課題である。

本論文では、第Ⅰ章で日本のボランティア団体の現状についてまとめ、なぜ若者がボランティア活動に参加しないのか考える。第Ⅱ章で若者が誤解しているであろうボランティア活動とは何なのか、また、その意味について検討し、誤解を解いていく。第Ⅲ章ではボランティア活動とは何かを、ボランティア活動から得られること、ボランティア活動によって生まれる経済効果の２点から検討していく。そして第Ⅳ章で若者がどうすればボランティア活動に参加するのかを考え、その方法について検討していき、第Ⅴ章では私のボランティア活動経験を述べ、実際の活動から得られたこと、ボランティア活動の魅力を改めて伝えていく。

Ⅰ　ボランティア団体と若者との間のギャップ

現在、日本に存在しているボランティア団体は、福祉や地域活性化など多岐にわた

1　International Association for Volunteer Effort（ボランティア活動推進国際協議会）の略称。個人・団体を問わず、ボランティア組織が互いに協力・理解することを目的として、1970年に設立された。

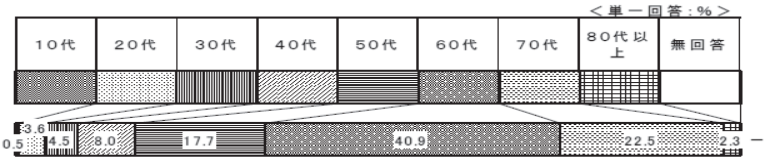
2　世界に向けて、ボランティアの定義、目的、意義についての共通の基盤を明らかにした宣言。

る分野で活動している。第Ⅰ章では、そのようなボランティア団体の構成員や参加理由、問題点をまとめる。次に若者がボランティア活動に参加しない原因について検討していく。

（1）ボランティア団体の現状

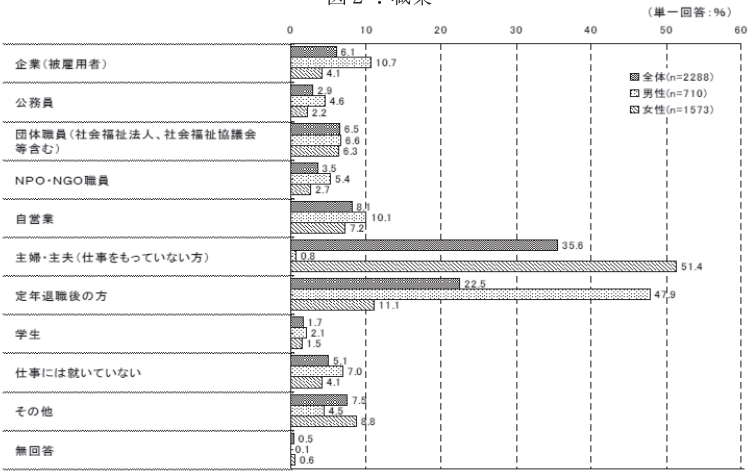
現在、日本におけるボランティア団体の現状はどうなっているのだろうか。全国社会福祉協議会が行った「全国ボランティア活動実態調査報告書」という資料をもとに、まずはボランティア団体の構成員について見ていく。

図１：構成員の年齢（調査数：2288）



出典：全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）

図２：職業



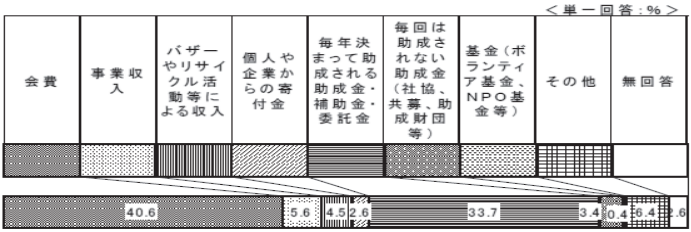
出典：全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）

図１は平成21年時点の年齢別に見た構成員の割合、図２は平成21年時点の構成員の職業を示している。主な構成員は60代以上が６割を超えている。しかし、40代、30代と年齢が下がるにつれ、構成員の割合は低くなっている。そして構成員の多くは女性（専業主婦）である。また、同報告書によると活動への参加理由としては、趣味・関

心からが４割を占め、恩返しや地域社会の改善のため、地域社会を知りたかったと続く。30代以下では、人格形成・成長という理由も多くなっている。

次に、ボランティア団体の主な収入源については、図３を見ていただきたい。

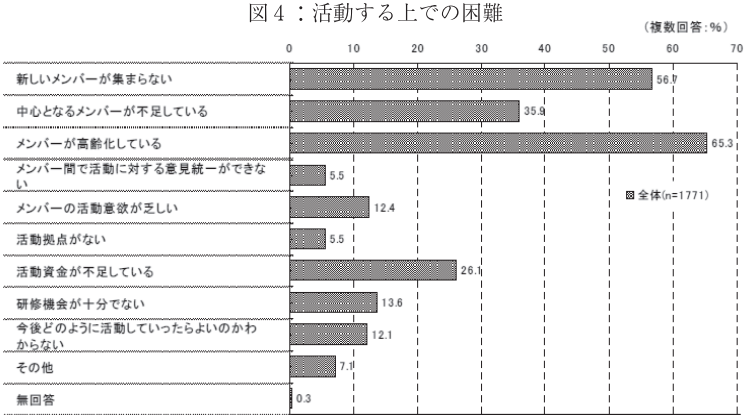
図３：主な収入源（調査数：2357）



出典：全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）

ボランティア団体の多くは収入の４割を会費、３割を政府自治体からの助成金等で賄っている。しかしながら、資金が不足している・やや不足しているとした団体は５割近くにのぼるのである。

図４：活動する上での困難



出典：全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）

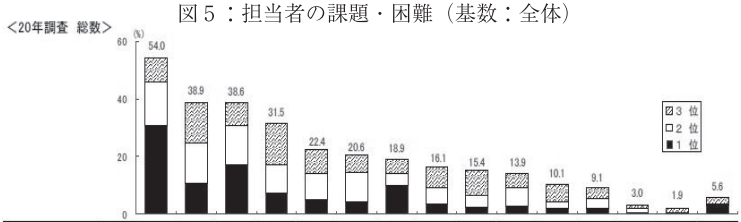
また、図４を見ると問題点として多く挙げられていたのが、メンバーの世代交代が進まないということである。団体の構成員は主婦が多く、家庭の事情や加齢とともに活動が継続できなくなるケースが多いが、新しいメンバー、特に若いメンバーの加入が少なく団体の存続にも影響している。また、活動に使用する機材のIT化が進み便利になっているものの、使い方が分からなかったり、使うことができてもその機能を十分に使いこなせていないなど、IT化への対応が困難となっているのである。実際、

パソコンの利用法も会報や活動記録の作成に留まり、ホームページの作成や広報活動等には至っていないのである。この点からも若いメンバーが必要とされているのが伺える。事実、私が取材[3] を行ってきた団体も同じ問題を抱えていた。

（2）なぜ若者はボランティア活動に参加しないのか

ボランティア団体は若者を必要としているのに、なぜ若者はボランティア活動に参加しないのだろうか。図5はボランティア関連科目・部署がある大学の職員に日本学生支援機構が、担当者の課題・困難に関する調査を行ったものである。

図５：担当者の課題・困難（基数：全体）



	N	学内の運営体制が不充分	他の業務が忙しく時間が充分とれない	学生の理解と関心が薄い	安全の確保や事故責任が必要だ	選択や精選が難しいボランティア・NPO情報の	教職員の理解と関心が薄い	予算の確保	地域の関係機関・団体との連携	専任のコーディネータの人材確保	拠点・スペースの確保	実態が理解できなく不安だボランティア・NPOの活動	機会の充実スタッフの研修や情報交換の	国など教育行政からの支援	企業からの社会貢献をとおした協力や連携	その他
1位～3位合計比率	903	54.0	38.9	38.6	31.5	22.4	20.6	18.9	16.1	15.4	13.9	10.1	9.1	3.0	1.9	5.6
1 位	903	30.9	10.9	17.0	7.4	4.7	4.2	9.7	3.4	1.9	2.9	1.6	1.7	0.5	0.1	3.3
2 位	903	14.9	13.7	13.8	9.7	9.2	10.5	4.1	5.7	4.8	6.0	2.7	3.4	1.2	0.3	0.3
3 位	903	8.2	14.4	7.8	14.4	8.5	5.9	5.2	7.1	8.7	5.0	5.9	4.0	1.3	1.5	2.1

出典：独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度　大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」

図５では、課題・困難として学生の関心が薄い・興味がない、といったことが挙げ

3　筆者は甲南大学で行われているCODEプロジェクトに参加し、ボランティア団体への取材を行った。CODEプロジェクトとは2004年度より甲南大学文学部社会学科の学生と東灘区ボランティアセンターとが協同で行っているプロジェクトである。活動内容は、神戸市東灘区で行われている地域活動やボランティア団体の調査を行い、調査結果をまとめ、地域への情報発信・各ボランティア団体の活動支援を行うものである。

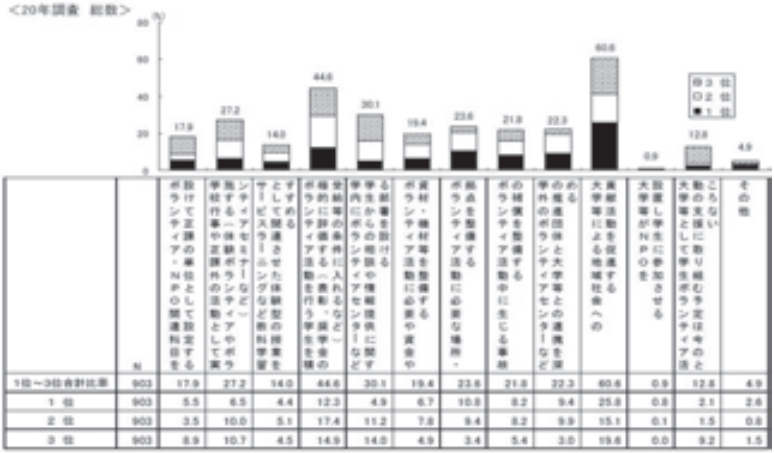
このプロジェクトで私は５団体への取材を行い、実際に活動している現場を訪問し、活動にも参加した。活動の多くは高齢者を対象としたものが多く、フラダンスやオカリナの演奏、お茶会の主催など様々だった。活動に参加している方の多くは、全国社会福祉協議会の調査と同様、主婦の方が多く、活動する上での問題点においても、若い人の参加者がおらず、世代交代が進まないとのことだった。

本論文を執筆するにあたり、今回の取材はボランティア団体の現実を知るという点、ボランティア活動を客観的に見るという点において、大変参考になった。

られている。この問題に関して私は、学生が忙しいというのが関係しているのではないかと考える。授業の取り過ぎや就職活動の早期化、アルバイトが主な要因となっているだろう。しかしながら、ボランティア活動には短時間でできるものあり、そういったボランティアの存在があまり認知されていないことも影響していると考えられる。

次に図６であるが、図５と同様に日本学生支援機構が学生ボランティア支援のための重点施策に関する調査を行ったものである。

図６：学生ボランティア支援のための重点施策（基数：全体）



	N	ボランティア課の一単位として認定する	学生が行う事業や課外活動として認定する	インターンシップやボランティアなどの実施	ボランティアセンターなどを設置する	学生ボランティアに対する表彰や賞状の授与	学内ボランティアに関する情報を提供する	学生部がボランティアセンターなどを設置する	資材・機材等活動を整備する	ボランティア活動に必要な場所・	学外のボランティア団体や大学等とのネットワークを深める	大学等法人による地域社会への	大学等がNPOに参加させる	大学等として学生ボランティアの活動に取り組む	こころの支援に関する	その他
1位～3位合計比率	903	17.9	27.2	14.0	44.6	30.1	19.4	23.6	21.8	22.3	60.6	0.9	12.8	4.9		
1 位	903	5.5	6.5	4.4	12.3	4.9	6.7	10.8	8.2	9.4	25.8	0.8	2.1	2.6		
2 位	903	3.5	10.0	5.1	17.4	11.2	7.8	9.4	8.2	9.9	15.1	0.1	1.5	0.8		
3 位	903	8.9	10.7	4.5	14.9	14.0	4.9	3.4	5.4	3.0	19.6	0.0	9.2	1.5		

出典：独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度　大学等におけるボランティア活動推進と環境に関する調査報告書」

図６では、以下のような施策や金銭的・技術的課題が挙げられている。学生ボランティア支援のために、情報提供に関する部署の設置、ボランティア関連科目を設け単位を設定する、更には資金や予算の確保や体験型授業の実施といったものである。

まず、情報提供に関する部署の設置であるが、これは現在、学生に提供される情報が少ないとも考えられる。この点に関しては、情報提供の方法にやや問題があるのではないだろうか。主な情報提供の方法が掲示板への掲示、ボランティア希望学生への連絡となっており、対象者が限られてしまっているのである。また、興味がないという理由も関連していると考えられ、情報が少ないことから、ボランティア活動が身近なものと感じられず、興味を持つ機会がなかったとも考えられる。

最後に、金銭的・技術的な課題であるが、ボランティア活動には交通費なども含め資金が必要であり、ボランティア団体の多くは経費を抑えてもより良い活動ができるよう日々、努力しているのが現状である。しかしながら、アルバイトのわずかな収入

しかない学生にとってはこういった経費が負担となるのだ。また、技術的な面に関してだが、イベント出演ボランティアなどは技術が必要であり、そういった団体の多くは独自で練習を行っていたり、講師を招いて指導してもらっているのが現状なのだ。毎日の授業やアルバイトがある学生にとっては、技術を身につけるための練習を行う時間を作ることは難しい。また、講師を招くにもお金が必要であり、若者にとってはやはり負担となってしまう。

本論文では、そういった状況の中で若者が如何にボランティアに参加できるようにするかを考えていく。

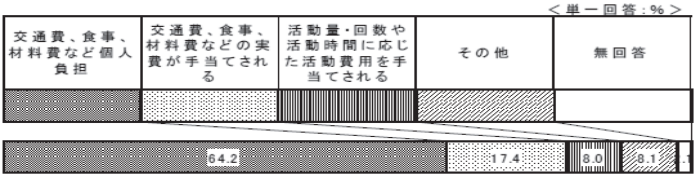
Ⅱ　ボランティア活動とは何か

第Ⅰ章では、ボランティア団体の現状から若者が必要であるにもかかわらず、当の若者がボランティア活動に参加しない理由について検討してきた。では、そもそもボランティアとは何なのかということをもとに、この第Ⅱ章では若者が誤解しているであろう点について検討し、その誤解を解いていきたい。

（1）ボランティア活動は無償の奉仕活動なのか

多くの人がボランティアという言葉を聞いてイメージするのが「無償の奉仕活動」ということではないだろうか。その為、ボランティアに参加しない人の多くは「無償と言いながら報酬をもらっている」、「報酬をもらうなら、ただの偽善ではないのか」と考えている。確かに、『大辞泉』（小学館）によると「《志願者の意》自主的に社会事業などに参加し、無償の奉仕活動をする人」となっている。事実、その通りなのであるが、近年では「無償」という点を考え直す動きが見られるのである。ボランティア活動をする上で、必ず必要となってくるのが活動費や交通費などである。図7はそういった経費に対する手当の有無についての資料である。

図７：ボランティア活動に対する手当（調査数：2288）



出典：全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）

図７のようにボランティア団体の多くは、会費や助成金で賄っているが、不足分は個人の負担によって賄っているのである。こういった厳しい経済状況の中で活動を続

けることが困難になっている団体も存在するのである。

ボランティア先の中には、好意で交通費などを支給する所もある。その場合相手との対等な関係を築くため、報酬としてもらうのが良いのではないだろうか。そういった、報酬を受け取るボランティアは有償ボランティアと言われており、近年ではこの有償ボランティアが定着しつつあることも事実である。

しかし、報酬をもらうことに関しては、賛否両論があるだろう。もちろん、基本的には報酬を受け取らないという姿勢は持つべきだと思うが、上のような場合に限り、報酬を受け取ることで、相手との良好な関係を築くことが出来ると私は考える。報酬を頂くことで、ボランティア先としては後ろめたい思いも無くなり、ボランティア団体としても、「より良い活動をしよう」と活動に力が入り、お互いにプラスとなるのである。

また、「報酬」というものには別の考え方も存在する。「報酬」という言葉を聞くとお金やモノを想像する人が多いだろう。しかし、ボランティア活動においての報酬とは、お金やモノだけではないのである。それは、笑顔になった人を見て自分が元気をもらったり、幸せな気持ちになったりといった気持ちや、経験のような目には見えない、形のないものである。金子郁容氏は「その人がそれを自分にとって“価値がある”と思い、しかも、それを自分一人で得たのではなく、誰か他の人の力によって与えられたものだと感じるとき、その“与えられた価値あるもの”がボランティアの“報酬”である。」述べている。[4] つまり、ボランティアに参加した人自身がその報酬を決めるのである。

ボランティア活動に対して、「無償」というイメージに囚われている人には、ここで述べてきたことを受け止めた上で、一度考え直してみて欲しい。

（2）「人の為」と「自己満足」

ボランティア活動にあまり良いイメージを持っていない人の多くは「ボランティア活動＝自己満足」と考えている人が多いように感じられる。実際、私の周りにもそう考えている人が多い。他方で、「人助け」としてボランティアを美化し過ぎている面もある。このことについて私は、少し考え過ぎなのではないかと感じる。確かに、自己満足ではないと否定することは出来ない。第Ⅰ章－（1）の参加理由でも趣味や恩返し、自己の成長といった理由があり、自己満足に過ぎないのかも知れない。私が取材を行った団体の中にも、「技術を向上させたい」という理由から、その為には人前でするのが良いと考え、その手段としてボランティアを選んだ人もあった。しかし、

4　金子郁容『ボランティア　もうひとつの情報社会』（岩波書店、1992年）150ページ

その団体の方は当初の理由はどうあれ、現在では真剣にボランティア先のことを考え、少しでも自分たちが役に立つのであればという思いで活動している人が多い。ボランティアを始める理由に「人の為」といった理由は少数派なのだ。とはいえ、結果として「人の為」、「人助け」となっているのは事実である。

実際、ボランティアに参加している人は、「人の為」「人助け」とは思っている人は少ない。金子郁容氏が「実際にボランティアに楽しさを見いだした人は、ほとんど“助けられているのはむしろ私のほうだ”という感想を持つ。」と述べている[5]ように、人助けをしているはずが、気がつくと助けられていると感じているのである。もちろん、ボランティア活動に参加している人の中には、「本当に人の役に立ちたい」、「困っている人を助けたい」という思いで活動している人もいるだろう。しかし、そういった人たちも、活動をしているうちに「助けられているのは自分だ」と感じていくのである。

また、私はボランティア活動に参加するにあたり、このように考えて参加している。それは、「人の役に立ちたい」とボランティア活動に参加するが、結果として自己の成長に繋がり、さらに「人の役に立てる」ということである。自分が成長することで、新たな活動に取り組むことが出来たり、技術も向上する。それによって、より質の高いイベントや演奏が出来、相手により満足してもらい、楽しんでもらうことが出来るのではないだろうか。つまり、人の為にしていることが、知らず知らずのうちに自分の為になっているのである。私を含め、ボランティア活動に参加している人の多くは、そう感じているに違いない。

ボランティア活動に参加している人の多くが、何かを「してあげる」のではなく、「させて頂いている」「一緒にやろう」と考えて活動しているのである。このような考え方は、東灘区ボランティアセンターや愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターなど全国のボランティアセンターでも、ボランティア活動をする心構えとして強調している。このように考えると、ボランティアというのは特別なことでも、すごいと言われるようなことでもないと感じられはしないだろうか。

確かに、自己満足であるという点は依然として否めない。しかし、その自己満足が人の為になることもあるのだと、少し視点を変えて考えることも必要なのではないだろうか。

Ⅲ　ボランティア活動の意義

第Ⅱ章では、多くの人がボランティア活動に対して抱いている誤解を解くため、ボ

5　金子郁容『ボランティア　もうひとつの情報社会』（岩波書店、1992年）２ページ

ランティアというものを別の視点から考えるよう提案してきた。新たなボランティア像を見出して頂けたのではないだろうか。この第Ⅲ章では、そういったボランティア活動の意義を、活動を通して得られること、活動による経済効果の２点から見ていく。

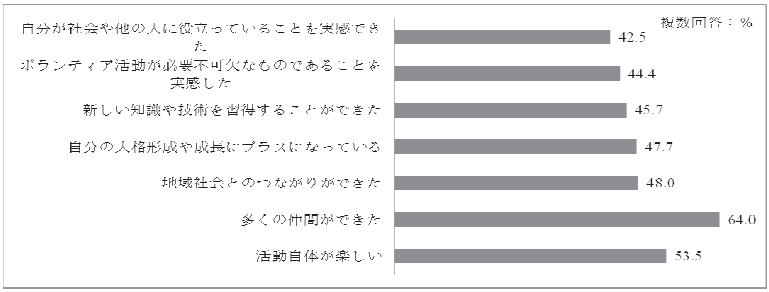
（１）ボランティア活動から得られること

ボランティア活動によって何が変わるのか、自分がどう成長するのかといった疑問を抱いている人は多いだろう。一般的に考えられているのが、コミュニケーション能力の向上や、自己の成長などが挙げられる。

日本学生支援機構の「平成20年度　大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」では大学側がボランティア活動に参加する学生に期待することについてもまとめられているが、ここでもコミュニケーション能力の向上や学ぶ姿勢・意欲の向上、公共の精神・マナーが身に着く、といった事が挙がっている。

では、実際にボランティア活動に参加している人は、ボランティア活動を通して、どういったことが得られているのだろうか。

図８：活動を通して得られたこと



※全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）の資料より、主なものを抜粋し作成

図８は、ボランティア活動を通して得られた事についてボランティア活動参加者を対象に全国社会福祉協議会が調査を行ったものである。このアンケートの回答では、仲間ができた、活動が楽しい、地域社会との繋がりができた、などが挙がっている。特に20代以下の回答は、全ての項目で他の年代を上回るのである。しかし、こういったものはアルバイトやサークルでも得られるのではないか、という声も聞く。特にアルバイトであれば、こういった経験も出来る上に給与も得られるため、学生の多くがボランティアとアルバイトでは、アルバイトを選ぶのである。

では、アルバイトやサークルとの最も大きな違いは何なのであろうか。それは「コスト」と「必要性」である。例えば、老人ホームでボランティア活動を行うボランティ

ア団体があるとする。老人ホームで演奏会などのイベントを行う場合、プロの演奏家を招くにも出演料などのコストがかかる。しかし、ボランティア団体による演奏の場合、そういったコストはほとんどかからないのである。ここで浮いた費用を老人ホームのより良い運営に使う事ができる。ボランティア団体の取材に行った際、その施設の方からもこのような話を聞く事ができた。

また、これは私が参加していた成人式の実行委員会の話であるが、成人式を運営するには警備や会場の設営など莫大な費用が必要となる。その為、新成人の誘導などは地域の方がボランティアとして担って下さった。もちろんお金を払い、アルバイトなどを募集すれば簡単に解決する問題である。しかし、資金は限られている為、いかに効率的に資金を運用するかが重要なのである。ボランティアの方が様々な面で協力して下さったおかげで、成人式を無事に行う事ができた。

老人ホームの場合も、成人式の実行委員会の場合も人を雇えば良い問題であった。しかし資金は限られているのである。そこにアルバイトなど、人を雇うことの限界がある。そんな中、老人ホームの方や行事を運営する人は、如何にして施設利用者や参加者に楽しんでもらい、満足してもらうかを考えている。ここで少し思い出して欲しい。地域のお祭りなどの行事の時、近所のおじさんやおばさんがスタッフという腕章を巻いていなかっただろうか。学園祭の準備で忙しそうに指示を出している友人を見かけたことはないだろうか。おそらく多くの人が思い当たることがあるのではないだろうか。私たちはこれまで、多くの行事やイベントに参加し、生活してきた。そこには多くのボランティアが関わっている。この様にボランティアが身近に存在するということを知らない人、気付いていない人は多いのではないだろうか。

私はボランティア活動を通じ、今、ここに私が存在しているのはボランティアを含め、多くの人に支えられてきたからなのだということを身を持って感じた。ボランティア活動に参加しなくても、そんなことは分かっているという人もいるだろう。しかし、頭で理解している事と、実際に経験して感じた事には大きな差があると私は考える。私もボランティア活動に参加する前は、そうであった。だが、ボランティア活動に参加した今では、普段の生活で「ありがとう」と言う機会が自然と増えていったのである。実際に体験し、感じた事は普段の行動に現れるのである。

事実として、ボランティアの存在によって様々な行事が成り立っているという点からボランティアが如何に必要なのかが分かる。

6　兵庫県の学生が様々なイベントをプロデュースし、みんなの夢を叶えること・兵庫県を盛り上げることをモットーに活動している総合学生イベントの総称。

7　夏休みに「街の学園祭」をテーマにユニフェスひょうごに参加している学生が行う祭り。神戸市にある神戸総合運動公園、通称ユニバー記念競技場を利用して行われる。

（２）ボランティア活動による経済効果

ボランティア活動のもう一つの意義として、経済効果を考える。では、具体的にはどういった経済効果があるのだろうか。

まず、私が参加したユニフェスひょうご[6] という学生ボランティア団体が開催したユニバー祭[7] を例にとって見ていこう。経済効果を計る方法として、ボランティアの活動時間を時給換算した人件費、そしてユニバー祭に出店していた屋台の収入を用いる。まず、このユニバー祭に参加したボランティアは約400人である。各個人のユニバー祭当日の活動時間は法定労働時間の８時間とする。また、時給は現在の兵庫県の最低賃金である734円を用いる。[8]

そうするとボランティアを労働として考えた場合、

734円×８時間×400人＝2,348,800≒250万円

の人件費が発生していたことになる。また、ユニバー祭には約40の屋台が出店していた。当日の来場者数は約5000人。屋台１軒当たりの売上数が300食とする。商品単価を300円とすると、

300円×300食×40軒＝360万円

の売上となる。ここから、ボランティアを労働として考えた場合の人件費250万円や機材のレンタル費用等を考慮すると、売り上げはほとんど出ずユニバー祭の開催自体が困難となっていた。しかし、ボランティアの参加により人件費が０円となったことでユニバー祭を開催する事ができ、屋台等による売り上げも生まれ、200万円超の経済効果が生まれたのである。更には当日までの準備やユニバー祭へ行く為の交通費などの費用も考えると、ユニバー祭関連だけで数百万円のお金が動いたことになるのである。

次に、各市町村などで活動しているボランティア団体によってもたらされる経済効果について考える。ここでは様々なボランティア活動がある中で、お茶会や演奏会を行っている団体を例にとって見ていこう。この場合、老人ホームなどが会場となる事が多く、参加費（お茶・お菓子代）として実費を500円程集金している。１回あたり20～30人の参加者があり、それだけでイベントが無かった場合と比べ

500円×20（30）人＝10,000（15,000）円

のお金が動くのである。

しかしながら、こういった活動による経済効果はそれだけではない。これは取材先で聞かせて頂いた話だが、お茶会や演奏会があると普段は家にこもっているお年寄り

8　兵庫労働局ホームページより

が、お茶会や演奏会に参加する為に外出する。そして演奏会でお友達もでき、元気になるのだそうだ。そうして徐々にではあるが、外出する頻度が増える。今までは家の中で主に生活しており、生活費も最低限しかかからなかった。しかし、外出するようになると服や化粧品、お友達とのお茶などお金が動くようになるのである。つまり、人が動くとお金も動くのである。こういったボランティア団体の活動により、お年寄りが元気になることで、その地域に新たな経済効果が生まれる可能性もあるのだ。また、将来的には医療費の削減にも繋がり、そこで削減されたお金を別の事に用いるといった効果も期待できる。

以上のように、ボランティア活動によって生まれる経済効果は多岐に渡る。ボランティア活動による経済効果はなかなか実感しづらいものであるが、確かに経済効果はあるのである。今回、例として挙げたものはその一部であるが、それだけでも経済効果があるという事が分かっていただけたのではないだろうか。

Ⅳ　どうすれば若者は参加するのか

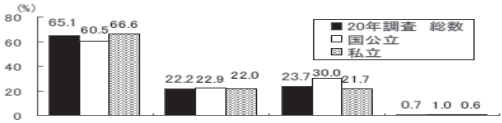
これまでボランティア活動について、その定義から良さなど多くの点について解説してきた。今までのボランティアに対するイメージや考え方が変わってきたのではないだろうか。しかしながら、今回テーマとして取り上げている若者のボランティア活動への参加をどう促進するのかは難しい点である。この第Ⅳ章では、若者のボランティア参加を促進する為の方法について考えていく。

（1）ボランティア活動の単位認定

若者がボランティア活動に参加する方法として考えられているのが、第Ⅰ章－（2）図５にもあるようにボランティア活動を講義として取り入れ、単位を認定するというものである。私はこの案に大いに賛成である。第Ⅰ章で若者がボランティア活動に参加しない理由として、授業やアルバイトが忙しい、興味がないといった事が挙げられていた。そうであるならばボランティア活動を授業とし、単位を認定する事によりこういった理由でボランティアに参加していなかった若者は参加するようになるのではないだろうか。

では、どれくらいの大学がボランティア関連の科目を開設しているのだろうか。独立行政法人　日本学生支援機構の「平成20年度 大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」によると、調査協力した大学860校のうち、ボランティア関連の科目を開設している大学は320校となっている。

図９：ボランティア関連授業科目授業区分（基数：授業科目数）



		N	講義	演習	実習	無回答
20年調査　総数		869	65.1	22.2	23.7	0.7
国公立・私立別	国公立	210	60.5	22.9	30.0	1.0
	私立	659	66.6	22.0	21.7	0.6

出典：独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度　大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」

また、図９を見るとその６割が主に講義室での講義が中心となっており、演習や実習は少ないのが現状であり、ボランティア活動そのものに参加することはほとんどないのだ。

私は、この点について提案をしたい。もちろん、ボランティアについて学ぶにあたり、ボランティアの歴史やその意義を学ぶことは重要である。しかし、第Ⅲ章－（１）で述べたように実際に体験する事で気付くことも多いのである。

私の考えとしては、講義の２回～３回を使い、ボランティアの歴史や意義を学び、４回～５回目の講義でボランティア活動に参加するための心得を学ぶ。やはり、ボランティアにただ参加すれば良いというものではない。ボランティアとしてのマナーやその意味合いなどを理解した上でボランティア活動に参加しなければ、相手に迷惑がかかり、喜んでもらうどころか不快な思いをさせてしまうこともあるのだ。そして６～10回目の講義で実際にボランティア活動に参加し、残りの講義で、ボランティア団体の方を招き講演会をしてもらったり、ボランティア活動を通して学んだことなどを発表、もしくはレポートを書くというのが良いのではないかと考える。

しかしながら、科目の形式を取るとボランティアの本来の姿である自主性や奉仕という面が失われるといった反対意見も存在する。もっともな意見であると私も思う。しかし、科目という方法はあくまでも若者がボランティア活動に参加する為の「きっかけ」なのである。今までのボランティアに対する考え方も大切ではあるが、ここで重要なのは考え方の転換である。この方法によりボランティア活動に参加した若者が、その必要性に気付き、５年後、10年後もボランティア活動に参加してくれると考えればどうだろう。そうなるとすれば、私は大変意味のある方法だと感じる。今、ボランティア活動に参加しない若者に必要なのは「きっかけ」なのだと私は思う。

また、単位認定を前提とした場合、単位目的での履修が問題となってくる。単位目

的の場合、ボランティア活動に真剣に取り組まないケースも出てくるだろう。それでは、受け入れ先の施設などに迷惑となってしまう。この問題の解決方法は難しいものであるが、一つの対策として考えられるのは単位の評価方法だろう。例えば、講義の欠席は３回以内とし、ボランティア活動中の態度や姿勢、レポート内容などを総合的に考慮するなど、多少厳しい評価基準を用いるというものだ。そうすることで、単位目的の履修者は減るのではないだろうか。

現実的に可能であるか分からないが、もう一つボランティア活動を単位として認定する方法として考えられるのが、授業や履修という枠に囚われず、学生が自主的にボランティア活動に参加し、その活動内容、成果などをレポートにまとめ大学に提出する（もしくはフォーラムでの発表）というものである。この方法であれば、ボランティアの定義である自主性も損なわれず、単位目的という問題も改善されるのではないだろうか。しかし、この方法の場合、単位を認定するにあたっての条件設定が難しくなる。どれ程の参加期間を定めるのか、成果についても単位を認定する基準がないのである。また、こういった取り組みを実施している大学は少なく、大学側の理解が必要となる方法である。その為には、ボランティア活動の必要性が社会的に認められていく事が重要だろう。

ここで述べてきた２つの案は、若者がボランティア活動に参加しない理由の中で特に多かった「忙しい」、「興味がない」という点を解決する為のものである。単位を取得できる講義や少し時間が出来た時にボランティア活動に参加するのであれば、「忙しい」という点は解決できる。「興味がない」ことに関しては、単位が取得できるという点からボランティア活動への参加を促す事が出来るだろう。また、全国社会福祉協議会の「全国ボランティア活動実態調査報告書」によると20代以下において社会的な評価が得られる事を希望する意見もあり、上記の方法であれば、単位の取得により卒業や就職活動にもプラスとなるといった事が期待される。

そうなれば、若者の参加を期待するボランティア団体と、若者のニーズが一致し、ボランティア活動の発展に繋がるだろう。そして何より、様々なことに挑戦できる学生という期間を、授業やアルバイトだけに費やしてしまうことが私には残念に思えてならない。

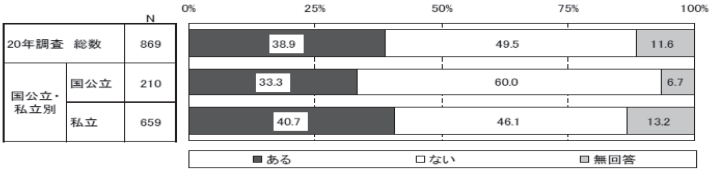
（２）ボランティア団体と学校側の連携

次に、若者を必要としているボランティア団体から、若者に呼びかける方法について考えていきたい。そもそもボランティア団体側が若者を呼び込む為の活動を行っているのかという点である。しかし、現在のところそういった活動を行っている団体はほとんど存在しない。第Ⅰ章－（１）でも述べたが、参加者の多くは主婦であり、家

事や本来のボランティア活動に追われ、若者の呼び込みにまで手が回らないのが現状なのだ。また、私が取材した団体でも地域のボランティアセンター[9] に登録し、団体の情報などを閲覧できるようにしているに留まっている。しかし、当の若者はボランティアセンターの存在すら知らないのが現状である。

では、ボランティア団体が若者に参加を呼びかけるには、どうすれば良いのか。その為に私は、大学とボランティア団体の連携が必要だと考える。図10を見ると分かるが、大学とボランティア団体との連携は4割弱とあまり進んでいないのが現状である。

図10：ボランティア関連授業科目における学外の関連機関・団体との連携（基数：授業科目数）



出典：独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度　大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」

そこで、ボランティア団体は自身の活動範囲にある大学に、講演会や学園祭のゲストに呼んでもらうよう依頼をしたり、メンバーを募集している旨を学生に伝えてもらう。または第Ⅳ章－（1）で述べた講義の際に、学生の受け入れ先として自身のボランティア団体も候補に挙げてもらうといったことも出来る。こういった方法であれば普段の家事や活動の合間に多少の時間を作ることで、若者との関わりを持つ事ができるはずである。

しかし、問題となってくるのが、大学側が連携するボランティア団体の良し悪しをどう判断するのかという点である。近年ではボランティア団体を装った不審な団体に学生が勧誘されるといった事も発生しており、その安全性などが問題となっている。ここでボランティアセンターを活用するのである。市区町村などのボランティアセンターは公的な機関であり、そこに登録されているボランティア団体は信頼できる団体である。つまり、大学側は依頼のあったボランティア団体の情報を確認し、ボランティア団体を選別できるのだ。また、大学側からボランティア団体に依頼する場合にも、ボランティアセンターを活用しても良いのである。

もう一つの問題点として挙げられるのが、学生への情報提供である。いくらボランティア団体と大学が連携しても、その情報が学生に伝わらなければ意味がない。第Ⅰ

9　市役所や区役所内に社会福祉協議会とともに設置されており、ボランティアに関する情報を提供する組織。通称ボラセン。

章－（２）で述べたが、現在の情報提供の方法は掲示板への掲示や、ボランティア活動への参加を希望している学生のみに連絡するというものである。これでは、学生がその情報に触れる機会が少なく、ボランティア活動への参加を促すには不十分である。多くの大学では学生に講義などの連絡をする際、個人のポータルサイトなどを通じて行っているはずである。もしくは学生専用のメールアドレスを利用しているだろう。ボランティア活動に関する連絡もポータルサイトなどを通じて行えばよいのである。そうすることで、学生全員に情報を提供する事が可能となる。それでも不十分であるとするならば、ゼミの担当教員を通じて直接ゼミの学生に伝えてもらってもよい。

このように大学とボランティア団体が連携する事で、若者にボランティア団体の存在を知ってもらい、活動への参加を促す事が可能となる。そこにボランティアセンターも加わることで、地域全体の取り組みにも発展し、ボランティア活動の発展にも繋がるのだ。そうして徐々にボランティア活動が活発になる事で、社会的にもボランティアが認知され、そういった取り組みに参加している大学の評価、ボランティア団体の知名度、その地域の良さといったことに繋がり、それぞれにとってプラスとなるだろう。そうなれば、ボランティアに参加しようという若者は増えるかもしれない。

Ⅴ　ボランティア活動体験報告

第Ⅰ章から第Ⅳ章にかけて、若者がボランティア活動に少しでも興味を持ち、活動に参加するようボランティア活動について検討し、提案を行ってきた。最後となるこの第Ⅴ章では、改めてボランティア活動の良さを感じてもらう為、私が今まで参加してきたボランティア活動の中から２つの活動を紹介する。

（１）学童保育支援ボランティア

このボランティアは、小学校で行われている学童保育の児童に人形劇やペープサート[10]、外で一緒に遊ぶといったこと行うボランティア活動である。

私はこのボランティア活動に高校２年生から３年生にかけて参加した。人形劇やペープサートについては地域のボランティア団体の方から学び、自分たちでオリジナルの物を作成した。実際に子供たちの前で人形劇などを行ってみると、子供たちは喜んで見てくれていた。これは学童保育の先生から聞いた話であるが、紙芝居などはするが、子供たちが飽きてしまっており、困っていたそうだ。また、外で遊ぶにしても学童保育の先生の人数は限られており、なかなか一緒に遊ぶことが出来ないのだと言う。そこに私たち高校生が来るということで、子供たちは普段とは違う人形劇や、普段は出

10　紙人形劇。人や動物の絵を描いた紙を割り箸などの棒に貼り付け、それを動かして行う。

来ない遊びが出来るので大変喜んでいたそうだ。ある先生は、「こんなに楽しそうな子供たちを見るのは久しぶり」とも仰っていた。

私はこのボランティアに参加して学童保育の現実を知ることが出来た。学童保育は両親が共働きで昼間は家に居ない為、小学校が終わってから夕方まで子供を預かるというものだ。しかし、その時間に２～３人の先生が30人近い子供の面倒を見なければならないのである。宿題をさせ外で遊ばせたりするわけだが、限界があるのだ。また、当の子供たちは１年生から６年生までが一緒なのだが、低学年と高学年の子供には体格に差があり、一緒に遊ぶことは難しいといった問題がある。しかし、こういった問題は高校生が少し時間を作り、手伝うことで多少なりとも解決するのである。

私はこの活動に参加し、高校生だから何も出来ないのではなく、高校生だから出来ることがあると気づくことが出来た。また、人形劇やペープサートなど、普通に高校生活を送っていただけでは縁がなかったであろう事にも挑戦することが出来た。そして何よりも、身近なところに問題が隠れている、ということを知ることが出来た。本来ならば、私たちが手伝いに行き、「先生方を助けた」ということになる。先生方からも「ありがとうございます。」と何度も感謝の言葉を頂いた。しかし、私たちはこれだけのことを経験させてもらったのだ。感謝しているのはむしろ、私たちの方である。私がこのボランティア活動に参加していたのは1年と短い期間であった。その期間でこれだけの経験が出来たのである。そう考えるとボランティア活動に参加することも良いとは思えないだろうか。

（２）成人式実行委員会

このボランティアは市より依頼があり、参加したものである。活動内容は、成人式の企画・運営となる。具体的には成人式のプログラムを考え、出演者との交渉や中学校、高校の恩師にメッセージを貰うこと、当日の司会、進行を行った。

このボランティア活動中、困難と呼べるものは多数あった。６月に委員会が結成されてから１月の成人式までの約半年間、週に１度は市役所で会議を重ねた。毎日の講義やアルバイトがある中、このように集まって会議をしなければならないことは委員にとっては負担であった。確かに、これも１つの困難であった。しかし、私たちにとって本当に意味のある困難があったのだ。

それは、新成人の舞台発表の内容を決める時のことであった。私たちは、この舞台発表でプロのピアニストを目指している新成人に、ピアノの演奏を依頼したのである。その曲目について、出演してくださる新成人の方から、ある曲を演奏したいと申し出があったのだが、委員の多くがその曲を聴いたこともなかったのだ。その時、出演者の方のその曲に対する思いも聞いていた。しかし、新成人の多くもその曲を知らない

だろう。ここ数年、新成人が成人式で暴れるということが各地で発生していた。そのこともあり、一部の委員は「みんなが知っている曲の方が静かに聴いてくれるのではないか」という提案をしたのだ。確かに知らない曲では退屈で新成人が暴れるという恐れもあり、議論は紛糾した。その時、委員会に携わって下さっていた市の職員の方が「成人式を成功させることも大事やけど、出演者の思いの方が大切なんじゃないのか。」と指摘して下さった。私も含め、委員の多くは成人式を無事に成功させることばかりに囚われていて、本当に大切なことを見失っていたのである。その一言で、出演者の希望の曲を演奏して頂くことになった。成人式当日、新成人は真剣にその演奏に聴き入っていた。

この活動は、自分と同世代の人について考えるきっかけともなり、更には自分自身についても考えるきっかけとなった。今まで、自分と同世代の人が関わっているニュースを見たとき、気にしながらも人ごとのように考えていた。しかし、この経験をして以降、以前より真剣にそのニュースについて考えるようにもなった。また、現実として同世代の人が抱えている問題を避けるのではなく、現実として受け止める必要があるということにも気づくことができた。

他にもこの活動で、第Ⅲ章－（1）で述べたように多くの人に支えられているということ、一つの組織に所属し、活動することの難しさなども学ぶことができた。そして何よりも、素晴らしい仲間との出会いがあった。不満があり言い合うこともあった。みんなと分かり合い涙することもあった。そして無事に成人式を成功させ喜び合った。わずか半年の間ではあったが、共に成長して来た仲間である。実行委員ではなくなった今でも、年に数回集まるなど、関係は続いている。

ここで述べたことの中には、ボランティア活動でなくても得られることがあるだろう。それでも、普通の生活では関わらないであろうことに挑戦し、社会問題に目を向け、身近な問題に気付き、仲間ができる。こういった様々なことが経験でき、成長できるのがボランティア活動なのだ。

おわりに

若者がボランティア活動に参加しなければ、多くのボランティア団体が存続の危機に陥るというのは紛れもない事実である。しかしながら、若者がボランティア活動に参加しないのは若者だけに原因があるのではなく、若者を取り巻く環境にも原因がある。早期化する就職活動や不景気など将来に対する不安はもちろん、ボランティア活動が身近なもの、自分の成長に繋がるものだと感じられる環境ではない、ということが要因となっている。

そういった背景のもと、私は本論文で若者がボランティア活動に参加する「きっか

け」としてボランティア活動による単位の認定、ボランティア団体と学校の連携という方法について考えてきた。おそらくこの方法によって急激な参加率の上昇が見込めるわけではないだろう。しかし、こういった取り組みによって学生が、学校や地域といった社会が、そしてボランティア団体が「ボランティア」について考え、ボランティアに対する理解を深めることが必要不可欠なのだ。

また、若者の参加を更に促すためには、金銭的な面については、やはり政府の援助や地方自治体の援助に期待せざるを得ないだろう。しかし、技術的な面に関しては、お茶会を開いて高齢者と話をするボランティアも存在しており、特別な技術を必要としないボランティアも存在することを、本論文を持って知って頂ければと思う。

そしてボランティア活動に参加することで、「多くの人に支えられている」ということを感じて欲しい。そうすれば人間関係が希薄になり自分勝手な振る舞いをする人も減るだろう。あなたは電車でお年寄りに席を譲っているだろうか。エレベーターで、他人が乗ってきた時「何階ですか」と聞いているだろうか。そして何より、「ありがとう」を素直に言えているだろうか。ボランティア活動に参加することで、そういった行動が自然ととれるようになるはずである。

私はボランティア活動を通して、普段の生活であっても「小さな思いやり」を持った人が増えることを切に願う。

参考文献

1．島田恒『NPO という生き方』（PHP 研究所、2005年）
2．金子郁容『ボランティア　もうひとつの情報社会』（岩波書店、1992年）
3．金子郁容『ボランタリー経済の誕生　自発する経済とコミュニティ』（実業之日本社、1998年）
4．長沼豊『市民教育とは何か　ボランティア学習がひらく』（ひつじ書房、2003年）
5．岩波書店編集部『ボランティアへの招待』（岩波書店、2001年）

参考新聞

1．日本経済新聞　（2007年４月16日、朝刊、25ページ）
（2009年８月19日、夕刊、17ページ）
（2010年７月２日、朝刊、39ページ）

参考 URL

1．文部科学省「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」（平成20年）
http://www.jasso.go.jp/syugaku_shien/documents/20tudoi_mext.pdf

2．文部科学省「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」（平成19年）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/07101511.htm
3．全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動実態調査報告書」（平成21年）
http://www3.shakyo.or.jp/cdvc/data/files/DD_08111830482620.pdf
4．ボランティア活動推進国際協議会 日本支部
http://iavejapan.org/default.aspx
5．独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度　大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」
http://www.jasso.go.jp/syugaku_shien/volunteer_2008investigation.html#report
6．「わが国のボランティア活動－『社会生活基本調査』の個票データによる観察結果－」（2005年）
http://www.mof.go.jp/jouhou/soken/kenkyu/ron104.pdf
7．財団法人自治体国際化協会「米国におけるボランティア活動－その理念と実態－」（1996年）
http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/cr120m.html
8．内閣府「平成21年版　防災白書」
http://www.bousai.go.jp/hakusho/h21/index.htm
9．ＵＮＮ関西学生報道連盟ニュースブログ
http://unnnewsblog.blog58.fc2.com/blog-entry-213.html
10．TBS「ワンステップ」
http://www.tbs.co.jp/onestep/
11．東灘区ボランティアセンター
http://www.higashinada-syakyo.or.jp/vol_center.html
12．愛知県社会福祉協議会 ボランティアセンター
http://aichivc.jp/index.html